

うさきおおがたこふん 埋もれていた佐紀の大型古墳

(仮称) 法華寺垣内古墳／平城京跡 奈良市法華寺町

調査地は、平城京の条坊復原では、左京一条三坊四・五坪にあたります。四坪・五坪ではこれまでに調査が行われておらず、今回が初めての調査です。

調査地の西側には、法華寺や海龍王寺があります。法華寺は、もとは平城京遷都に大きな力を發揮した藤原不比等の邸宅でしたので、この周辺には有力な貴族が住んでいたことが想定されます。

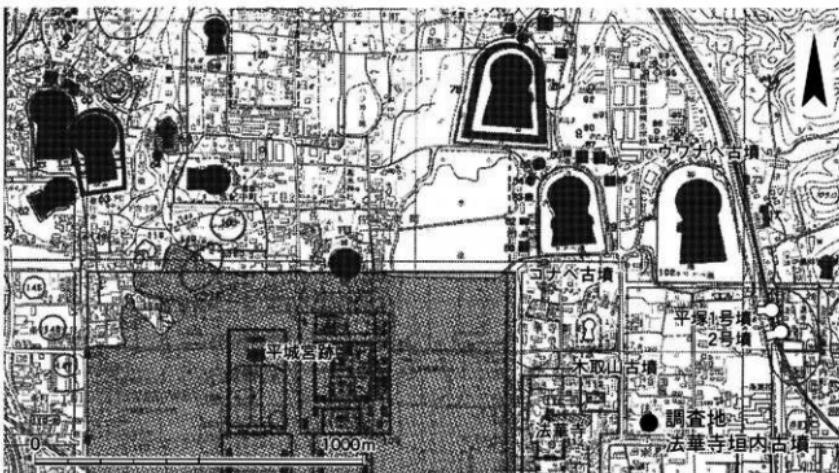
調査地は四坪と五坪にまたがっており、その間の坪境小路を確認することやそれぞれの宅地内の様相を知ることなどを目的に、6つの発掘区に分けて調査を行いました。ところが、坪境小路はなく、また、奈良時代の遺構は少ないとわかりました。坪境小路がないということは、四坪と五坪が同一の宅地として利用されていたのかもしれません。

また、奈良時代の遺構のほかにも、古墳時代や平安時代、鎌倉時代の遺構も見つかりました。

新発見の古墳 古墳時代の遺構では、古墳の葺石と周濠を部分的に検出しました。この古墳は、新発見の古墳で、土地の字名から仮に法華寺垣内古墳とよぶことにします。

この古墳は、葺石を検出した位置から推測すると、後円部を北にした南北方向を主軸とする前方後円墳になると考えられます。全体の規模はわかりませんが、前方部の前端幅は約65mになりそうです。

今回3ヶ所で検出した葺石は、前方部の東、西、南(前端)の葺石にあたると思われます。前方部東側の葺石は崩れしており、残り具合があまりよくありませんでしたが、西側と南側とではよく残っており、大形の石材を基底石に使っていました。西側の葺石は高さ0.9m分が残っていました。葺石の石材は、丸みを帯び、角を残すものが多いという特徴から、佐保川の河原石が使われているようです。



調査地と佐紀古墳群 (1/15,000)

佐紀古墳群と法華寺垣内古墳 調査地の北側には大形前方後円墳を含む佐紀古墳群が存在し、北約200mのところにはウワナベ古墳やコナベ古墳があります。法華寺垣内古墳も佐紀古墳群を構成する古墳の一つになると思われます。

法華寺垣内古墳では、円筒埴輪や朝顔形埴輪、家や盾や蓋を象った形象埴輪が出土しています。円筒埴輪の特徴から、この古墳は5世紀前半頃の古墳と考えられます。これは、コナベ古墳とほぼ同じ時代と考えられます。

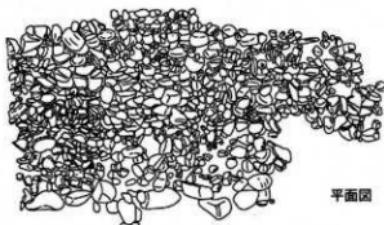
平城京と古墳群 佐紀古墳群では、平城宮・平城京造営の際に壊された古墳が、発掘調査で、いくつかみつかっています。調査地の周辺では、ウワナベ古墳の東南でみつかった木塚1・2号墳やコナベ古墳の南でみつかった木塚山古墳がそれにあたります。おそらく、法華寺垣内古墳もそれらと同じく、平城京造営の際に削平されたものと思われます。奈良時代のできごとを記した『統日本紀』には、都を造るにあたり、墓を壊した際には手厚く葬れ、という命令がでていることが記されています。

法華寺東方出土の長持形石棺

法華寺垣内古墳に関して、興味深い資料があります。それは、法華寺の東方、通称一条通りで出土したと伝えられる長持形石棺の蓋石の破片です。出土地は、調査地のすぐ南にあたります。この石棺は、現在、横浜市の三溪園にあります。

長持形石棺は、古墳時代中期の組合せ式の石棺で、蓋石、底石と側石4枚の6枚からなります。また、長持形石棺は、全長100m以上、なかでも150m以上の前方後円墳の埋葬施設として用いられることが多いようです。

法華寺東方出土の長持形石棺は、これまでに平塚古墳（全長約70m）やコナベ古墳（全長210m）に用いられていた石棺ではないかと考えられていました。新発見の法華寺垣内古墳は、前方部の幅から推測すると全長が100mをこえると思われ、また、石棺の出土位置とも近接しています。法華寺垣内古墳がこの石棺を用いていた古墳である可能性もあるでしょう。



平面図



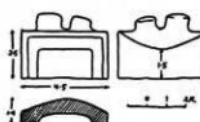
立面図

前方部西側の葺石図 1/50

ところで、前方部の東南角で検出した石積みは、西側や南側の葺石とは斜面の傾きが異なり、石が置き直されているように見られます。石材も意識的に小ぶりの円礫が使われているように思われます。平塚古墳では奈良時代に古墳の葺石を圍池の一部に利用しており、法華寺垣内古墳でも同様に古墳の葺石が庭園に利用されたかもしれません。



土生田純之「横浜市三溪園の石棺」1987より抜粋



梅原末治「久津川古墳研究」1920より抜粋
法華寺東方出土の長持形石棺図
(上・下図は同じ石棺)